

---

# 浦島太郎その後

ピストン源次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

浦島太郎その後

### 【Nコード】

N61570

### 【作者名】

ピストン源次郎

### 【あらすじ】

あの浦島太郎の続編です。

「ぶおっ！ ほっ！ ほっ！・・・」

玉手箱から立ち上る白煙を浴びた太郎は、みるみる白髪のおじいさんになってしまいました。

「な、なんじゃこりゃあ！！」

太郎は、真っ白な長いあご髭を手にとって叫びました。見ると、髭を持つ手も骨張ってシワだらけ、まるで自分の手ではないようです。

「はい」

カメは、用意していた鏡をそつと太郎に差し出しました。

太郎は、鏡に映った己の顔をまじまじと覗き込み、しばらく呆けたように手で顔を撫で回していましたが、そのうち力が抜けたように、砂浜にへたり込んでしまいました。

「乙姫様を怨まないでください」

カメがおずおずと言葉をかけました。

「しかたなかったんです」

太郎はしわがれ声で聞き返しました。

「しかたなかった？・・・」

「そうです。いくら乙姫様でも、自然の摂理を曲げるわけにはいきません。こうするより他なかったのです」

「ようわからん」

「でしょうね。信じてもらえないかもしれませんが、つまりこういうことです。竜宮城はこの世ではありません。時の流れも、この世

のそれとは比較にならないくらい、ゆるやかなのです。だから、あそこではみんな幸せです。生き急ぐ必要がありませんからね。ゆったりと人生を楽しむことができます。でもそれは、あくまで竜宮に留まればこそのこと。地上に戻る者には、その分の付けを負わさなければなりません。地上に、あそこの時の流れを持ち込むことは乙姫様にも許されてはいないのです」

それを聞くと、太郎はがっくりと肩を落して言いました。

「その付けが・・・この玉手箱というわけか」

「そうです。あなたには、ほんの一時の愉悦に過ぎなかったとしても、あそこではそれが永遠なのです。だから、乙姫様は、最後まであなたを引き止めた。だのにあなたは・・・」

「なぜ最初に言ってくれなかったんじゃ！　こうなることを」

太郎は声を荒げてカメにくっついてかかりました。

いつのまにか、言葉づかいまで、老人のそれに変わっていました。

「言えばあなたはそれを信じましたか？　信じて竜宮に留まったでしょうか？」

太郎は、返す言葉がありませんでした。

「・・・わしは、これから・・・」

太郎は、皺の中に埋もれた目をさらに細めながらつぶやきました。

「これから、いったいどうやって生きていけばいいんじゃ」

「・・・」

「おまえさんの話しが本当だとすると、わしの両親はとくに亡くなってるだろう・・・知り合いや友人も、既にこの世にはいないかも知れん・・・生き長らえていたとしても、このわしを見てあの太郎だと分かってくれるかどうか・・・子どももないこのわしは、一人ぼっちで、これからどうやって・・・」

あなたは竜宮で乙姫様と幸せな家族を作ることまでできたのですと言いかけて、カメは言葉を呑み込みました。  
この哀れな老人を、さらに鞭打つようなまねはしたくなかったのです。

「人は歳をとると、過去の思い出にふけて時をすごすと聞きます」  
カメは囁きかけるように言いました。

「あなたには、どんな老人にも負けない、素晴らしい思い出があるはずです」

「・・・竜宮での思い出だけをかみしめて、残りの人生を生きるというのか」

それもさほど長いことではないでしょうと言いかけて、カメはまた口をつぐみました。

「おまえさんには、まだ人というものが分かっておらんようじゃの」  
太郎は、茫洋とした眼差しでつぶやくように言いました。

「思い出というのは、山あり谷ありでこそ味わい深いというもの。  
どんなに極上の悦楽も、それだけでは、ただ日ごとに色褪せてゆくだけ・・・」

「・・・わたしにどうしろと?」

「わしの人生を返せ・・・とは言うまい・・・これはこれでわしの人生・・・そういう定めだったんじゃろう」

太郎は、しばらく物思いにふけてっているようでしたが、やがてぼつりと言いました。

「これで終わりにしたい」

「え?・・・」

カメは、太郎の言葉の意味がのみこめずに聞き返しました。

「いま、何と・・・」

「終わりにしたいんじゃ・・・竜宮での日々が色褪せんうちに・・・あの乙姫様のえもいわれぬ笑みが、ぼやけてこんうちにな・・・」

カメは、しばし無言でしたが、やがて

「・・・わかりました」

と言うなり、カメにも似合わぬ素早さで跳ね上がり、太郎の喉に食いついたのです。

太郎は、くわつと目を見開き、しばし震える手を宙にさ迷わせていましたが、やがてがっくりとしなだれ、それきり動かなくなりました。

カメは、太郎の息が止まったのを確かめてから、そつとその干乾びた喉から口を離しました。

そして、前足で砂浜に大きな穴を掘り、後足で丁寧に太郎の亡骸をそこに埋めてから、浜辺に沿ってゆっくりと歩き始めました。

乙姫様の花婿候補を求めて、また腕白小僧たちを捜し始めたのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6157o/>

---

浦島太郎その後

2010年10月31日15時12分発行